

古典語にみる反実仮想の表現について

一 はじめに

反実仮想の表現は、中古まで「マシカバ……マシ」、「マセバ……マシ」、「セバ……マシ」のような呼応形式によってきたのである(奈良時代には『ませば……まし』という型であったのが平安時代では『ましかば……まし』という型になっている)⁽¹⁾。

ところが『今昔物語集』における条件句に「マシカバ」を含む反実仮想の表現における帰結句の実態を分析してみると、次の表Iのような結果となり、反実仮想の表現形式として帰結句に「マシ」をとらないものが数多く認められるのである。

結果をみると、帰結句の末尾に「カ」、「ヤハ」といった疑問の語や推量の助動詞「ム」、「ベシ」が連接する形式となっているのである。

該当する用例を示すことにしよう。

〔助動詞「ベシ」によるもの〕

此ク知タラマシカバ、副テ行テコソ懸サスベカリケレ。

(三十・一)

京ニテ此ク宣ハマシカバ、下人ナドモ具スベカリケル者ヲ。

表 I

条件句	帰結句												
	マシカバ	コソ	コソ	ゾ	マシヤハ	マシモノヲ	コソ	ベカリケルモノヲ	ム	ムカ	ムヤ	ヤハ	(帰結句省略)
	マシ	マシ	マシカ	マシ	マシヤハ	マシモノヲ	マシ	ベカリケレ	ム	ムカ	ムヤ	ヤハ	(1)
	38	2	3	1	3	1	1	1	1	1	1	2	1

() 内は和歌の内訳数を示す

清*
水
登

〔助動詞「ム」によるもの〕

(二十六・十七)

不緩ズシテ有マシカバ、何ナル盗人有トモ致シテ許コソハ此
ハ被接メ、手ノ限り戦テ搦ムル様モ有ナム。(二十九・二十一)
今夜ヒ家ノ内ニシテ焼キ被致ナマシカバ、只今マデ命存セム
カ。(二十五・五)

何況ヤ、我レ、一生ノ間功德ヲ修シタラマシカバ、如此クノ
苦ニ預カラマシヤハ、亦、極楽ニモ不參ザラムヤ。

(十三・四十四)

〔推量の助動詞を欠くもの〕

此ノ金ネ无カラマシカバ、汝ヲ致ト思シヤハ。(四・三十四)
若狭ノ國ヘ不行ザラマシカバ、此ノ人ヲ見付ケシヤハ。

(十六・七)

〔「コソ」に対し「マシ」と結び、已然形のかたちで結んでいないもの〕

『其不御マシカバ、此身コソハ出テ神ニ被食マシ』ト思ヘバ、
(二十六・八)

山階寺ニ前ニ申シタラマシカバ、山階寺ノ末寺ニテコソハ有
マシ。
(三十一・二十三)

次に『今昔物語集』以降の反実仮想の形式について概観してみよう。

かく有べしと知たらば、六人の子供前後にたて、矢種のあら
ん限射尽て、討死して失たらば、名を後代にあげてまし。

(保元物語・中)

今度の合戦に院方かたせ給ひたらば、いかなる軍功勳賞にも
申替、又命にかへてもなか義朝一人を助ざるべき。(同・中)
かく有べしとだに知たらば、いひをき度事共有つるを、父の

呼せ給ふと聞つる嬉しさに、急まいつる計也。(同・下)

かゝるべしとだに知たらば、皆ぐしてぞ参らまし。(同・下)

せめては一人なり共相具たらば、縦のがれはてず共、手を取
くみてもいかにもなりなまし。(同・下)

ともに帰結句に「マシ」を伴い、過去における反実仮想の表現
となつてゐる。

清盛の軍みてたゞれたる弓手のかたてを羽引て越、うしろな
る柱にしたゞかたつ。すこしさがりたらばあやうくぞみえら
れける。(平治物語・中)

右に該当する箇所は『保元物語』において次のような本文にな
つてゐる。

今少あかりたらましかば、頸の骨何かはあらまし。あふなか
りし事ぞかし。

『平治物語』の「タラバ」と、『保元物語』の「タラマシカバ」
とは、条件句の接続用法として等価的表現と考えられる。

先に驢馬のわびた時、そつと合力したらば、これほどの重荷
は持つまじいものを。(天草本伊曾保物語)

存生の時、それほど直に心があつたらば、今この害をば受け
まいものを。(同)

『天草本伊曾保物語』における「タラバ」も、過去における反
実仮想の表現の条件句に用いられた形式とみることができる。

このやうにあらうと知つたらば、兼平を瀬田へやるまじいも
のを、(天草本平家物語・卷一)

〔平家物語・河原合戦〕かかるべしとだに知りたりせば、今井を
勢田へはやらざらまし」

ありし六日の暁を限りとだに思うたならば、なぜにのちの世
と契らいであらうぞ。(同・巻四)

表II

条件句	帰結句	保元物語	伊曾保物語	平家物語
タナラバ	(疑問詞) ウ		天草本 伊曾保物語	天草本 平家物語
タナラバ	ウズルモノヲ			1
タナラバ	ウモノヲ			1
タナラバ	マイ			2
タナラバ	ウモノヲ			1
タラバ	ウズ(レ)			1
タラバ	マイモノヲ		1	
タラバ	マジイモノヲ		1	
タラバ	マシ	2		
タリセバ	マシ	1		
タラバ	(疑問詞) ベキ マシ	1		
タラバ	マシ	4		

〔平家物語・小宰相身投〕それをかぎりとだに思はましかば、な
どのちの世とちぎらざりけん、思ふさへこそかなしけれ〕
頼朝をうち頼うでおぢやうたならば、命ばかりは助けうずる
ものをおほせられた。(同・巻四)
命計はたすけ奉ッてまし〕
『天草本平家物語』における「タラバ」も、過去における反実
仮想の表現の条件句に用いられた形式とみることができる。
「タラバ」による接続用法を含め、過去における反実仮想の表
現を形式によりまとめたものが次の表IIである。
室町期の口語資料において反実仮想の表現としての形式「マシ

カバ……マシ」、「マセバ……マシ」が姿を消してしまっている。
また『今昔物語集』以降の、現時点における反実仮想の表現は
次のようになっていた。

かく有べしと知ならば、なじかは八幡へ参りけん。
(保元物語・下)

頼朝世に有ならば、いかなる佛事をもとりおこなふべけれど
も、かゝる身なれば力なし。
(平治物語・下)

エソボさへもあるならば、この不審をたやすう聞き、わが眷
れをも輝かし、国の智略をもあげうずるに、悔ゆるにかひない
越度をした。
(天草本伊曾保物語)

かの鶏さへないならば、これほど払暁には起されまじい
ものを。
(同)

この君世にござらば、われもさこそあらうするに、この
やうになりはてさせられたいとほうしさよ。
(天草本平家物語・巻四)

以上のような結果から推測するならば、『今昔物語集』以
降の反実仮想の表現形式は、
現時点 過去

マシカバ……マシ タラ(ナ) マシカバ……マシ

ナラバ……ム・ベシ タラバ……マシ・ベシ

ナラバ……ウズ・マシ タラバ……ウズ・マイ・マシ
(タナラバ)

のような変遷をたどったのではないかと推測されるのである。
その結果、室町期における口語資料の反実仮想の表現におい
て「マシカバ……マシ」、「マセバ……マシ」のような呼応形

式が衰退していったものと思われる。

二 中古における「マシ」による
条件表現について

前項においては、院政・鎌倉時代の文学作品（今昔物語集・保元物語・平治物語）における反実仮想の表現を分析・検討した結果、反実仮想の条件句「マシカバ」の呼応する帰結句において「マシ」の他に「ムシ」「マツシ」「ム」の使用例が認められる。

では、中古の散文や和歌において反実仮想の条件句「マシカバ」に呼応する帰結句はどのようなものであったのか。中古の散文を代表するものとして『竹取物語』、『伊勢物語』、『平中物語』、『大和物語』、『源氏物語』、『土佐日記』、『蜻蛉日記』の七作品を取り上げることとする。中古に続く、鎌倉時代のものとして『大鏡』、『平家物語』、『徒然草』の三作品もあわせ取り上げることとする。

条件句に「マシカバ」、「マセバ」、「セバ」を含む条件表現についてまとめたものが表IIIである。

また和歌については、『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾

表III

資料名	条件句		帰結句																				
	マセバ	マシカバ	マシ	セバ	ナラバ	テバ	タラバ	ナバ	ザラバ	(動詞未然形)バ	ズハ	(形容詞)クハ	テハ	マシカバ	ム	ケム	ベシ	ム	ケム	ベシ			
竹取物語		1		1(1)	1															1			
伊勢物語	1(1)			2(2)	2(2)						1(1)		1(1)										
平中物語				1(1)							2(2)												
大和物語				3(3)	3(2)						4(4)	1(1)								1(1)			
源氏物語	2(2)	83(5)		2(2)	9(6)	1				7(5)	10(5)	1	3	3	9	1				52(2)			
土佐日記		2(1)			1(1)					1(1)													
蜻蛉日記		6(2)		1(1)	2(2)					2(1)					1					3(2)			
大鏡		9								2	2			2	1					2			
平家物語		1			4(2)			2							2	2	1	1			1	1	1
徒然草		3														2			1	1		1	

() 内は和歌の内訳数を示す

表IV

資料名	表現形式		条件句											参考 条件表現以外のマシ					
	マセバ	マシカバ	マシ	セバ	ナラバ	ナバ	タラバ	ザラバ	(動詞未然形)バ	ズハ	(形容詞)カラバ	テバ	マセバ		マシカバ	セバ	ム	ベシ	(帰結句省略)
古今和歌集		1		14	5			1	2	2		3	1						11
後撰和歌集	3	3		7	10	1	1	1	5	4	1	2				1			18
拾遺和歌集	3	5		9	7			1	2	4		1		1		1			22
後拾遺和歌集	2	1		23	8	1		1	7	8	1	1			12	1		1	19
金葉和歌集	1			14	5				3	7					1		1		3
詞花和歌集		1		5	5				1	5		1			3				6
千載和歌集				22	19				6	13		1			10			2	11
新古今和歌集	1	3		12	4				3	7		2	1		3				20

遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』、『新古今和歌集』について取り上げることにする。

条件句に「マシカバ」、「マセバ」、「セバ」を含む条件表現についてまとめたものが表IVである。

反実仮想の表現形式について中古の散文において特徴的なことは、「マシカバ……マシ」の呼応形式が他の形式を圧倒していることである。『平家物語』、『徒然草』のような鎌倉時代の表現形式にあっては、前項で指摘されたごとく、条件句「マシカバ」と呼応する帰結句に「ベシ」、「ム」といった推量の助動詞を含む形式が目立っているのである。

和歌において特徴的なことは、「マシカバ……マシ」の呼応形式に比べ、「セバ……マシ」、「ナラバ……マシ」、「ズハ……マシ」のような呼応形式が多用され、散文とは異なる傾向を示している。また『徒然草』に「マシカバ……マシ」の目立った使用が認められるのは、本書の擬古的な表現態度を反映した結果と考えられる。

条件句「マシカバ」と呼応する帰結句に「ベシ」、「マジ」といった推量の助動詞を含む形式が『蜻蛉日記』、『源氏物語』に存し、注目される。その具体例は次の通りである。

「マシカバ……ベシ」

さきこえたらましかば、いかにあるべかりける。(蜻蛉日記)

この世の人には違ひて思すに、おいらかならましかば、心苦しきあやまちにてもやみぬべきを、いとねたく、負けてやみなんを、心にかからぬをりなし。

(源氏物語・夕顔)

心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍びこめられたりけるをなむ、かへりてはうしろめたき心なり。

(同・薄雲)

まことに君をこそ、今の心ならましかば、さやうにもてなし
て見つべかりけれ。(同・玉鬘)

ほろほろと泣けば、げにあはれなりける昔のことを、かく聞
かせざらましかばおぼつかなくても過ぎぬべかりけり、と思し
てうち泣きたまふ。(同・若菜上)

昔よりおほけなき心のはべりしを、ひたぶるに籠めてやみは
べなましかば、心の中に朽して過ぎぬべかりけるを、
(同・若菜下)

げにおはせましかば、おぼつかならず往き返り、かたみに
花の色、鳥の声をもをりつけつつ、すこし心ゆきて過ぐしつべ
かりける世を、など思し出づるにつけては、(同・早蕨)

「……この御ことはべらざらましかば、内々やすからずむつ
かしき事はをりをりはべりとも、なだらかに、年ごろのままに
ておはしますべきものを」など、うち泣きつつ言ふ。
(同・東屋)

「……すこし近きほどならましかば、そこに渡して心やすか
るべきを、荒ましき山道に、たやすくもえ思ひたたでなん、と
はべりし」と聞こゆ。(同・東屋)

生きたらましかば、わが身を並ぶべくもあらぬ人の御宿世な
りけり。(同・蜻蛉)

「マシカバ……マシ」

男君ならましかばかうしも御心にかけたまふまじきを、

(同・濡標)

院政期の『大鏡』にも同様な表現形式(マシカバ……ベシ)が
存し、掲げておこう。

かく知らましかば、君たちをこそ、われより先にうせたまひ
ねと、祈り思ふべかりけれ。

三 条件表現「マシカバ……ベシ(マジ)」(反実仮想)の呼 応について

中古、条件表現(反実仮想)の条件句「マシカバ」と呼応する
帰結句において、「マシ」に代わり「ベシ」、「マジ」といった推
量の助動詞が使用されるようになったのは、どのような事情によ
るものなのであろうか。

根来司氏に次のような「マシ」の用法についての言及がある。³⁾

つぎに、源氏物語には「ましかば……む」と呼応した形はみ
えないのであるが、吉沢義則博士の対校源氏物語新釈でみると
ただ一つ、つぎのやうな例がある。

罪いと深かなるわざと思せば、かるむべき事をぞすべき、
七日々に経仏供養すべきよしなどこまかに宣ひて、いと
暗うなりぬるに帰り給ふも、あらましかば、今宵帰らむや
は、とのみなむ。(蜻蛉)

これは薫君が律師に浮舟の法事のことを指図した後、浮舟を
思ひ出すところであるが、このあらましかば、今宵帰らむやは
は源氏物語大成でみると「む」とある本文はなく、すべて「ま
し」とあるから湖月抄本の誤りかと思はれる。したがって、源
氏物語には「ましかば……む」の例はないといふことになるが、
ここの「帰らましかば」の「まし」は「む」とかはらない「ま
し」の意味にとれさうである。

ここで「ここの『帰らましかば』の『まし』は「む」とかはら
ない『まし』の意味にとれさうである」とする根拠としては、同
氏により次のような中古における「マシ」の二つの用法に関する
見解が示されている。⁴⁾

そこで中古における「まし」の用法をかへりみると、二つの

表V

表現形式	資料名												
マシ	ゾ……マシ	ヤ……マシ	カ(ハ)……マシ	コン(ハ)……マシカ	マシヤ	マシヤハ	マシヲ	マシモノヲ	ベシ	ベタアリケルモノヲ	コン……ベカリケレ	カハ……ム	ヤ……ム
古今和歌集	11			4		2	2	4	6				
後撰和歌集	20	6				5	4	1	4			1	
拾遺和歌集	20	6	2			2	1	1		1	1		
後拾遺和歌集	30	3	6	4		5	2		3	1			
金葉和歌集	14	2	4	3	1	2	2		2				1
詞花和歌集	9	1	4	2			1		1				
千載和歌集	18	3	11	6		1	3		8				
新古今和歌集	16	1	5	2		3	3		3				

場合が考へられる。

一つは現実の状態に反対なことを仮定して、その下で推量する場合で、(中略)

二つには「む」に近い意味に用ゐられる場合で、物やいひ寄らまし、とおぼせど、うちつけにやおほさむと、心恥かしくてやすらひ給ふ。(同) 〔筆者注、源氏物語〕末摘花といふやうに、これは疑問語か疑問の係り助詞といつしよに

あるのが普通である。しかして、この前二者の「まし」の用法は中古においてはほぼ同じくする比率であらわはれてゐる。

したがって根来氏が指摘された、中古における疑問語や疑問の係り助詞とともに使われる場合の「マシ」と推量の助動詞「ム」の意味的接近が「マシカバ」「マシ」より「マシカバ……ベシ」、「マシカバ……マシ」のような表現形式を出現させる契機となつたのではないかと思われるのである。

それでは中古における散文や和歌において「マシ」はどのような使用状況にあつたのか。

和歌ならびに前掲の中古・院政・鎌倉時代における散文の、条件句に「マシカバ」、「マセバ」、「セバ」を含む条件表現の帰結句の形態についてまとめたものが表V、VIである。

散文における「マシ」による帰結句の形態をみると、帰結句の内部に係り結びを含む形式「ゾ……マシ」、「ヤ(ハ)……マシ」、「カ(ハ)……マシ」ならびに「マシ」に詠嘆的な気持ちを込めることによつて成立したと思われる「マシヲ」、「マシモノヲ」などの形式は、中古の『源氏物語』において多用されている。また和歌(八代集)においても同様な傾向が認められる。これらの表現形式は、微妙な心情を表現するにふさわしいものとして中古の文学作品には欠くことのできないものであつたであろう。ところが院政・鎌倉時代の散文においては、そのような「マシ」による表現形式が姿を消していくのである。このことについては、小林賢次氏が次のように分析されている。⁽⁵⁾

すなわち、『今昔』の場合、「マシカバ……マシ」の表現形式は依然として勢力の強いものであつたけれども、すでに、その帰結句「マシ」は単独終止の用法に限定されつつあり、固定的・慣用的性格を持つようになつてゐたものと推測されるので

表VI

表現形式 資料名	マシ	ゾ ……マシ	ヤ(ハ)……マシ	カ(ハ)……マシ	コン……マシ	コン(ハ)……マシカ	マシヤ	マシヤハ	マシヲ	マシモノヲ	マシ体言	ベキヲ	ベキモノヲ	ベカリケルヲ	ベカリケルコトヲ	ベカリケル体言	ベクモアラヌ体言	ベカリケルモノヲ	ベカリケリ	カ……ベキ	ヤ……ベキ	カ……ベカリケル	コン……ベカリケレ	ベカリシカ(トモ)	マジキヲ	ム	ムカ	ムヤ	カ……ム	ケム	ムズルモノヲ	ジ	ジモノヲ	ヤハ		
竹取物語	2								1 (1)																											
伊勢物語	2 (2)	1 (1)							2 (2)	2 (2)																										
平中物語		1 (1)		1 (1)				1 (1)																												
大和物語	5 (5)			2 (2)			3 (3)		1 (1)																											
源氏物語	70 (12)	7 (1)	10 (2)	9 (2)	2	8 (3)	6 (3)	6	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1				1	1												
土佐日記	1 (1)					2 (1)			1 (1)																											
蜻蛉日記	6 (2)	2 (2)	1 (1)		1	1	1	1	2 (2)														1													
大鏡	8 (1)		2	2		2	1																1													
今昔物語集	38	1			2	3		3	1 (1)									1					1		1	1	1								2	
保元物語	3	1		2																																
平家物語	6 (2)			1																1	1		1		1				2	1	1	1				
徒然草	3																									1	1						1	1		

() 内は和歌の内訳数を示す

ある。

院政時代、反実仮想の表現「マシカバ……マシ」が固定的・慣用的性格を持つにいたったことは、次のような『今昔物語集』の例(「コン」という係助詞に対し、その結びに「マシカ」(已然形)のかたちをとらずに、「マシ」(終止形)のかたちをとる)によって首肯できるのである。

『其不御マシカバ、此身コンハ出テ神ニ被食マシ』ト思ヘバ、

(二十六・八)

山階寺ニ前ニ申シタラマシカバ、山階寺ノ末寺ニテコンハ有マシ。

(三十一・二十三)

さて前述の根来氏が指摘された、疑問語や疑問の係り助詞ともに使われる場合の「マシ」の用法についてであるが、中古の散文をみると、帰結句の内部に疑問の係り助詞「ヤ」を含む表現形式(ヤ)ハ……マシ)が『蜻蛉日記』に一例、『源氏物語』に和歌の二例を含め一〇例存するのである。具体例は次の通りである。

咲きにける枝なかりせばとこなつも

のどけき名をや残さざらまし (蜻蛉日記)

心の中には、いとかく品定まりぬる身のおほえならで、過ぎにし親の御けはひとまれる古里ながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし。(源氏物語・帚木)

「……ましてさかゆく春に立ち出でさせたまへらましかば、世の面目にやはべらまし」と聞こえたまふ。(同・花宴)

「……承り過ぐしてましかば、御事や添はまし」と申したまふに、(同・行幸)

たづぬるにはるけき野辺の露ならば
うす紫やかごとならまし (同・藤袴)

花といはば、かくこそ句はまほしけれな。

「……櫻に移してば、また塵ばかりも心わくる方なくやあらまし」などのたまふ。(同・若菜上)

かたほにもおほせましかばあたらしう惜しき方の思ひはうすくやあらまし、など明け暮れ思し乱る。(同・椎本)

君がをる峰のわらびと見ましかば
知られやせまし春のしるしも (同・椎本)

我ならで尋ね来る人もあらましかば
さてややみなまし、いかに口惜しきわざならましと、(同・総角)

さらずは、御心より外なる事どもも出で来て、おのづから人に軽められたまふこともやあらまし。(同・宿木)

もし世におほせましかば、またかやうに思すことはありもやせまし。(同・宿木)

以上の一一例は根来氏が指摘された、帰結句の内部に疑問語や疑問の係り助詞を含む「マシ」の用法に該当し、推量の助動詞「ム」に近い用法をもつものと考えられる。中古における散文や和歌におけるこのような「マシ」の用法が反実仮想の表現「マシカバ……マシ」の帰結句における本来の「マシ」の用法を交錯させ、「ベシ」、「マジ」、「ム」といった推量の助動詞に交替していく契機となったものと思われるのである。

小林賢次氏の次のような言及がある。⁽⁶⁾

「マシ」の歴史をたどるならば、中古において、条件表現における用法のほか、「ヤ……マシ」など、疑問助詞・疑問語を伴った用法が発達したことは、すでに上古からみれば、反実性が希薄になってきていることの現れにはかならない。このような用法は躊躇・逡巡の気持を表すことによって、否定的に作用し、

非現実的な想像を表す点で、反実仮想の場合と通ずるものを持つとはいえ、やはり「ム」等との境界を曖昧なものとし、「マシ」の意味を不明確なものとする一因となったに違いない。

四 まとめ

中古までの反実仮想の表現は、「マシカバ……マシ」、「セバ……マシ」のような呼応形式によってきたのであるが、その後、「マシ」の衰退・消滅により、同表現形式は「ナラバ……ム・ベシ」、「ナラバ……ウズ・マシ」(現時点)、「タラバ……マシ・ベシ」、「タラバ(タナラバ)……ウズ・マイ・マシ」(過去)のような呼応形式に転換していくこととなる。反実仮想の表現は、中古の散文や和歌において「マシカバ……マシヲ・マシモノヲ」、「セバ……マシヲ・マシモノヲ」のように、心情を表現するにふさわしいものであったが、その後(院政・鎌倉時代)、「マシカバ……マシ」は、帰結句における「マシ」が終止の用法に限定され、その結果、固定的・慣用的性格を帯び、そのことが「マシ」の衰退・消滅を促したものと考えられる。

また「マシカバ……マシ」の帰結句に疑問語「ヤ」を含む形式が中古に現れる。このようなことが「マシ」と「ム」、「ベシ」、「マシ」などの推量の助動詞との間に語液的接近を促し、後、「マシ」から「ベシ」、「ム」に交替していく契機となったものと推測されるのである。

注

- (1) 根来司『平安女流文学の文章の研究』(昭和四十四年・笠間書院)一四八頁。
- (2) 拙稿「院政期から室町期までの接続表現について——ナラバ・タラバ・ナレバを中心として——」(『日本近代語研究2』平成七

年・ひつじ書房)二九二頁。

(3) 根来司「中世人と中古語——文語研究への一課題——」(『国語学』十九輯)五八頁。

(4) 「中世人と中古語——文語研究への一課題——」五七頁。

(5) 小林賢次「日本語条件表現史の研究」(平成八年・ひつじ書房)七八頁。

(6) 『日本語条件表現史の研究』一〇二頁。

資料の底本は次の文献による。

- 「竹取物語」「伊勢物語」「大和物語」「平中物語」「竹取物語 伊勢物語 大和物語」・日本古典文学全集・小学館
- 「今昔物語集」(『今昔物語集』一—五・日本古典文学大系・岩波書店)
- 「保元物語」「平治物語」(『保元物語 平治物語』・日本古典文学大系・岩波書店)
- 「源氏物語」(『源氏物語』一—六・日本古典文学全集・小学館)
- 「土佐日記」「蜻蛉日記」(『土佐日記 蜻蛉日記』・日本古典文学全集・小学館)
- 「大鏡」(『大鏡』・日本古典文学全集・小学館)
- 「平家物語」(『平家物語』一—二・日本古典文学全集・小学館)
- 「天草本伊曾保物語」(大塚光信校注『キリシタン版エンボ物語』・角川書店)
- 「天草本平家物語」(亀井高孝 阪田雪子翻字『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』・吉川弘文館)
- 「徒然草」(『徒然草総索引』・至文堂)
- 「古今和歌集」(『古今和歌集』・古典文学全集・小学館)
- 「後撰和歌集」(『後撰和歌集』・新古典文学大系・岩波書店)
- 「拾遺和歌集」(『拾遺和歌集』・新古典文学大系・岩波書店)
- 「後拾遺和歌集」(『後拾遺和歌集』・新古典文学大系・岩波書店)
- 「金葉和歌集」(『詞花和歌集』・新古典文学大系・岩波書店)
- 「千載和歌集」(『千載和歌集』・新古典文学大系・岩波書店)
- 「新古今和歌集」(『新古今和歌集』・古典文学全集・小学館)